

# 聴覚障害者競技団体は パラリンピックに復帰を！

## 徳安利之

二〇二〇年東京オリンピック・パラリンピック開催まで、あと二年あまり。核やミサイル開発で緊張する国際情勢のなか、北朝鮮の突然の参加表明で、政治色一色に染まった感のあるピョンチャン冬季オリンピックも、無事に閉会しました。日本人選手も、フィギュアスケートの羽生選手、スピードスケートの小平、高木選手の金メダルやカーリング選手の銅メダルなど、連日のように活躍が報道されました。その余韻の残るさなか、引き続き冬季パラリンピックが開催し、再びアルペン女子滑降座位で村岡選手が銀メダルを獲得するなど、日本人パラリンピック・アスリートの皆さんの活躍が茶の間の話題になる昨今です。

私はスポーツには無縁で、還暦もとうに過ぎ、三途の川に片足を突っ込んでいる年代の聴覚障害者。少年の時代に失聴し、現在のように恵まれた障害者教育環境ではなかった時代に、健聴者の中で採まれ、「忍耐」「自立」などの言

葉をよく聞かされる教育環境の中で育ち、どちらかと言えば自身で道を切り開き生きて来たように思います。若い頃は障害者福祉活動に熱心で、「聴覚障害者に自動車運転免許を！」と行政などへの要望を繰り返すような時代もありましたが、年を重ね今はすっかり角が取れた老いぼれです。こんな私が、障害者の最高のスポーツの祭典と称されているパラリンピックに、聴覚障害者競技のないことに初めて疑問を感じたのが、二〇〇〇年に開催されたシドニー・パラリンピックです。テレビで開会式の様子を眺めていると、当時の障害者スポーツ大会で当たり前のように映されていた、ろうあ者や手話通訳者が一切いない異様な報道で、後になって聴覚障害者競技団体はパラリンピック委員会から脱会していて、参加していない事実を知ったのです。その後で開催されたアテネ・パラリンピックや北京・パラリンピックなどにも注視していましたが、相変わらず

聴覚障害者競技は参加しないままで、様々な障害者が一堂に集い、障害者スポーツを競い合うときに、何故聴覚障害者競技がないのか、疑問が膨らむばかりでした。その頃は、国連では障害者の尊厳や権利を保障する障害者権利条約が採決され、日本でも障害者基本法や差別解消法が成立し、共生の社会の実現が人類のユートピアだという考え方が普遍的な時代になったのです。共生の考え方は現在もそうですし、パラリンピックの理念にもうたわれています。

国際オリンピック委員会と国際パラリンピック委員会が協定を結び、オリンピック開催後にその地で引き続きパラリンピックの開催を義務付けたのが、シドニー・パラリンピック開催の時で、その後のアテネ、北京、ロンドン、リオと引き継がれ、世界が注目するパラリンピックの現在の姿になったのです。こんなに共生が普遍的な時代にあつて、パラリンピック委員会に加盟し、共に活動していた聴覚障害者競技団体は、なぜいつまでもパラリンピックに復帰せず、他の障害者と一堂に集い、世紀の障害者のスポーツに加わることを考えないのでしょうか。

歴史を草創期にさかのぼって調べてみると、パラリンピックの前身は脊椎傷害者の競技大会の「国際ストーク・マンデビル大会」です。しかし、第二回パラリンピックである、半世紀前の東京パラリンピックが、現在のパラリンピックの礎にあると考えられるのではないのでしょうか。そ

の一九六四年の東京パラリンピックは、当時の開催を管轄していた厚生省が「盲、ろうあ者を含む全ての障害者のスポーツの国際大会」として開催を全面的に支援しているのです。半世紀前の資料によると、一九六四年東京パラリンピックは二部構成ながら、聴覚障害者競技団体も参加した、障害者が一堂に集う祭典だったのです。

その後で、国際パラリンピック委員会の組織運営上の屈曲があり、聴覚障害者競技団体はパラリンピックに参加せず、一九二四年から開催している聴覚障害者の国際スポーツ大会「デフリンピック」の方に傾倒しています。しかし、パラリンピックがオリンピック開催地で引き続き開催を義務付けられて、様々な支援を享受できる開催環境になった現在、聴覚障害者競技がパラリンピックにはなくて、せっかく様々な障害者が一堂に集い、障害者アスリートの一員としてパフォーマンスする機会をみすみす逃しているように思えてならないのです。

現在、日本の聴覚障害者の団体には、長い歴史のある「デフリンピック」を管轄している「ろうあ連盟」をはじめ、中途失聴者や難聴者の「中途失聴者・難聴者協会」、さらに視覚と聴覚に重複した障害のある人たちの「盲ろう者友の会」など、障害の軽重やコミュニケーションの違いから様々な組織があります。それぞれの組織で、聴覚障害をもつ皆さんも、障害者アスリートとして活動しているのです。

聴覚障害者競技団体はパラリンピックに復帰を！

パラリンピック委員会を統括する「日本障がい者スポーツ協会」関係者や、委員会を管轄しているスポーツ庁関係者はこれをどのように考えておられるのでしょうか。日本のスポーツ基本法にも機会の均等がうたわれており、パラリンピックもその法の精神の延長上にあるはずです。

聴覚障害者競技団体も、時代の変化に対応して、パラリンピックに復帰することを真摯に考えるときではないでしょうか。離脱した事情や、「デフリンピック」の開催意義も充分理解できますが、国際社会の一員として、共生の輪のなかに入って自分たち聴覚障害者アスリートの存在をアピールするべきだと強く訴えたいのです。

私の周りにも、毎週スポーツセンターに集い卓球の練習をしている、ろうあ者のグループがいますし、盲人マラソンに伴走者と一緒にマラソンを楽しむ盲ろう者もいます。彼らはパラリンピックとは無縁ですが、希望すればパラリンピックの卓球部門の一画に聴覚障害者部門を設けるとか、盲人のマラソンに盲ろう者の参加を認めるとかはできないものでしょうか。オリンピックで難民の方の参加が認められているように、指定された基準をクリアすればパラリンピックに聴覚障害者個人も参加できるようなシステムの構築は、無理な願いでしょうか。

現在パラリンピックは文部科学省管轄になっています。ろう学校の教職員の方々など特殊教育に携わっておられる

先生方も、聴覚障害者競技のないパラリンピックを、どのように受け止めておられるのでしょうか。ろうあ者の児童生徒さんからの「どうしてろうあ者はパラリンピックに参加していないの？」との、素朴な疑問の声に何と応えておられるのでしょうか。パラリンピックへの聴覚障害者競技の復帰は、教育上の見地からも、全ての障害者が健常者と共に共生して生きることの素晴らしさを実感させる良い機会だと思っております。

二〇二〇年東京パラリンピックが、半世紀前の一九六四年東京パラリンピックの崇高な理念を承継し、全ての障害者のアスリートの皆さんが一堂に集う最高の障害者スポーツの祭典になることを願っています。



徳安利之

とくやす としゆき

1952年生まれ 広島市在住

小学生の時に交通事故に遭い、聴力を失聴し全く聞こえなくなる。中学校までは何とか地元の学校で学び、その後ろう学校高等部を卒業するが、公立高校で学び直し、歯科技工専門学校に進学。四十代まで歯科技工士として働く。その後、現在勤めている会社に異業種転職し、定年後も高齢者再雇用を続けて働いている。